

博物館の地域連携

—和歌山市立博物館の場合—

額 田 雅 裕

- I. はじめに
- II. 基本的運営方針の策定と地域連携
- III. 学校及び地域との連携事業
 - (1) 教育プログラム
 - (2) 校区探検
 - (3) 博物館お出かけ歴史講座
 - (4) 回想法プログラム
 - (5) わかやままちなかミュージアム
- IV. おわりに

I. はじめに

和歌山市立博物館では、これまで地域連携をあまり意識せず、博物館活動を行ってきたが、「和歌山市立博物館基本的運営方針」^D（以下、基本的運営方針）を契機として学校及び地域と博物館との連携に本格的に取り組み、新たな連携事業を始めた。まず、その経緯を述べ、当館の地域連携について概観する。

II. 基本的運営方針の策定と地域連携

2008年6月11日、およそ半世紀ぶりに博物館法（1951年、法律第285号）が改正され、続いて2011年12月20日には同法第8条に基づいて「博物館の設置及び運営上の望ましい基準」（文部科学省告示第165号）が告示された。これによって、当館の地域連携が体系的に始動しはじめた。

同基準では、博物館の運営について、各博

物館は「基本的運営方針」を策定し、公表するよう努めるものとする定め、文化庁は公立博物館に基本的運営方針の策定を指導した。当館は、これを受けて博物館活動の目的を明確化し、市民のためのよりよい博物館をめざすため、博物館活動の新たな指針として基本的運営方針を策定し、入館者増をはかるため学校及び地域との連携を強化してきた。

当館の基本的運営方針では、2015年度から5年の期間を定め、取組分野ごとに目標指標を設けて年度ごとに点検しながら、活動方針の達成を目指していくとしている。評価項目は、博物館の基本的機能である資料の収集保管事業、展観事業、調査研究事業、教育普及事業の4つに、情報発信と施設の維持管理運営を加えた6つで、それぞれ2～9の具体的な数値指標を設定した。これらの評価項目のなかには、第Ⅲ章に示した学校や地域と博物館との連携に関係する項目がいくつか含まれている。

2020年3月、それからちょうど5年が経過したので、その実績値・達成度などの成果を検証し、展観や教育普及など各事業の課題や問題点を確認した。それぞれの取組分野のなかで、学校及び地域との連携に関するものを取り上げ、その現状と若干の考察を行いたい。

III. 学校及び地域との連携事業

和歌山市立博物館で行っている地域連携事

キーワード：博物館，地域連携，基本的運営方針，和歌山市

業は、学校との連携と地域との連携の2つに大きく分けられる。前者の主なものとしては、小学校を対象とした①教育プログラム、②校区探検、中学校を対象とした③職場体験、小学校から高等学校までを対象とした④出前授業、大学の⑤博物館実習、⑥学芸員課程の博物館見学、⑦ミュージアム・ボランティア、⑧大学への出講などである。後者には、⑨博物館お出かけ歴史講座、⑩回想法プログラム、⑪和歌山市の職員出前講座、⑫わかやままちなかミュージアムなどがある。

その中で、学校との連携として教育プログラムと校区探検、地域との連携として博物館お出かけ歴史講座、回想法プログラムとわかやままちなかミュージアムについて述べる。

(1) 教育プログラム

教育プログラムは、主に企画展「歴史を語る道具たち」の開催期間中に小学3年の社会科の「昔の道具と人々の暮らし」の単元に対応して行っている²⁾。それには、企画展示と常設展示の民俗コーナーを活用した90分コースと60分コースの2つがある。

基本的な90分コースは、博物館の講義室にて「昔の米作り—脱穀関連用具—」という映画(約15分)と行灯・火打石・さおばかり・蓄音機など昔の生活道具の実演(約15分)を行い、その後、1クラスに1人の学芸員がついて展示室を案内(30分)したのち、ワークシートを使って各自あるいはグループで見

学・自習(約30分)という構成である。自習時間には、展示室に体験用として展示している唐箕と台ばかりをだれでも自由に使って昔の道具を体験できる。各コースの時間についてはバスや電車の時刻、学校の授業時間に合わせて、臨機応変に学校の要望に応じている。

教育プログラムの小学校の団体入館状況は、2019年、和歌山市内の小学校52校中45校と90%近い小学校が来館している(表1)。和歌山市外の小学校も14校と近隣の岩出市・海南市・紀の川市、大阪府岬町・阪南市・泉南市から各市町立小学校の半数近くが当館を利用している。和歌山市内で来館していない7校を調べると、市域の周辺部に位置する学校や公共交通のやや不便な地区に位置していることがわかった。市外の小学校では、遠足や社会見学と兼ねてバスをチャーターしている学校、次いで当館が和歌山市駅に近いことから電車を利用する学校が多い。少人数の小学校では、市役所等のマイクロバスを利用しているところもある。

企画展の入館者数は、5年間で約20%増加した。それは、この5年間、教育普及事業に重点を置き、土曜日の午後にはビー玉、メンコ、竹馬、羽根つき、おはじき、お手玉など昔の遊びや蓄音機でレコードを聴くなど、子どもを対象とした体験学習を毎年5回ずつ、当初の目標よりたくさん開催したことが入館者数の増加に繋がったと分析している。

表1 教育プログラムの小学校団体入館実績

	2010年	2011年	2012年	2013年	2014年	2015年	2016年	2017年	2018年	2019年	2020年	コロナのため中止
和歌山市内 来館学校数(校)	13	14	40	44	40	44	40	42	※41	※45	※41	3
和歌山市内 来館児童数(人)	923	953	2,181	2,643	2,241	2,319	2,082	2,338	2,542	2,551	2,299	249
和歌山市外 来館学校数(校)	10	17	14	13	9	14	5	8	12	14	14	3
和歌山市外 来館児童数(人)	489	892	574	462	384	519	257	338	573	730	863	173
合計 来館学校数(校)	23	31	54	57	49	58	45	50	53	59	55	6
合計 来館児童数(人)	1,412	1,845	2,755	3,105	2,625	2,838	2,339	2,676	3,115	3,281	3,162	422

※本町小・城北小・雄湊小の3校は2017年4月伏虎義務教育学校1校に統合。

(2) 校区探検

小学6年生を対象とした校区探検は、郷土の歴史に興味をもってもらうため、和歌山市内の小学校と協力して社会科や総合学習の授業時間に行っている。当館では、これまでに一般を対象とした、史跡や文化財をめぐる史跡散歩を年1~2回、これまで34年間に50回開催してきた。そのノウハウを活かして、小学校区にある史跡や文化財を歩いてめぐり、現地で郷土の歴史を学んでもらう機会とするものである。この5年間では校区探検を8回行った。なかには、校区の史跡や文化財を自分たちで調べて、博物館で児童による発表会を開いたこともある。

(3) 博物館お出かけ歴史講座

博物館お出かけ歴史講座は、各地区の自治会や地域の団体からの申込みを受けて、市内各地に学芸員が出向き、その地域の歴史や文

化財を紹介するものである。学芸員は、担当地区を決めて、その地区から依頼があれば、すぐに講座を実施できるよう体制を整えて準備をしている。この事業は2018年12月から開始したばかりであるが、2019年度には8回開催した。

(4) 回想法プログラム

回想法とは、認知症の方が昔の生活道具に触れたり写真を見ることによって、脳が活性化し認知症の予防や進行を遅らせる効果があるという非薬物療法の一つである。2014年、館内会議で入館者を増やす方策を検討した際、学芸員から愛知県の北名古屋市歴史民俗資料館や富山県の氷見市立博物館が回想法プログラムを行っている。当館でも回想法を取り入れてはどうかという提案があり、同年度からすぐに取り入れることになった。近畿では当館が最初に回想法プログラムを実施し

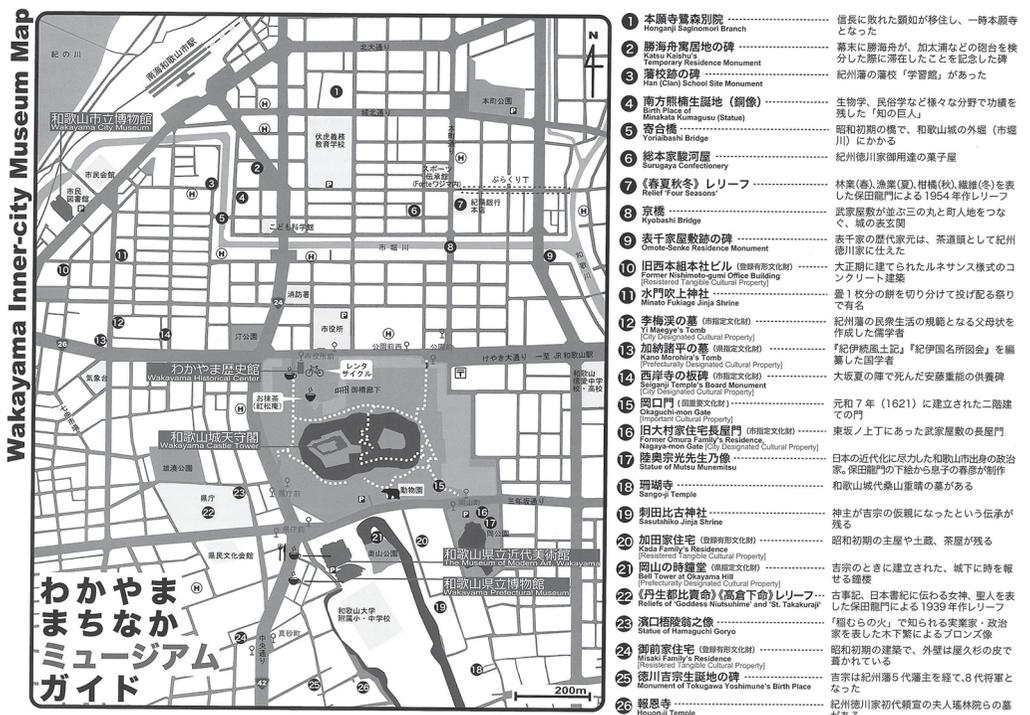


図1 わかやままちなかミュージアムマップ

た。冬季企画展開催中、むかしの生活道具を体験学習室に展示して、いつでも利用してもらえるようにした。

回想法は、2015年に新聞等で取り上げられたため、高齢者福祉施設からの問い合わせが相次ぎ24件、261人の利用があった。翌年からは和歌山市の高齢者福祉課に依頼して市内の高齢者施設約200か所に情報提供したが、それ以降は利用施設数・利用者数とも年々減少した。冬季に博物館まで来館しなければならないことがネックのようである。

回想法プログラムの主な利用者は高齢者福祉施設の方々であったため、2020年1月以降は新型コロナウイルスの感染拡大の影響で、来館が皆無となっている。

(5) わかやままちなかミュージアム

わかやままちなかミュージアムは、和歌山城周辺の4館と和歌山市駅に近い当館との5館が連携して、入館者・観光客らの回遊性を高め、相互に入館者の増加をはかるため、2017年1月から会議を重ねた。そして、当館が主体となって「わかやままちなかミュージアムガイド」⁹⁾というマップを作製し、「まちなかの博物館・美術館をめぐるろ！」をキャッチフレーズに、同年8月から2館目以降は割引料金で入館できるように、5館が協力している。割引した入館者数は、65歳以上と高校生以下の無料入館者を除いて、5館で2,000人余りと、全体の構成比からは1%にもみえないが、マップを活用し「④南方熊楠生誕地」など、まちなかの文化財をめぐる人は確実に増加し滞在時間が増す効果にも結び付いているので、今後も継続していきたい。

IV. おわりに

(1) 当館の地域連携は、基本的運営方針に基づいて行った結果、校区探検・出前授業などの回数は設定した目標値の3倍以上になり、入館者数も5年間で約42%増加した。

(2) 学校との連携では、企画展の教育プログラムの参加小学校数が徐々に増加し、2019年には市内小学校の約90%に達した。小学校との連携は、予想以上の成果が上がったといえる。しかし、少子化により、これ以上3年生の来館者数の増加は望めない。これに加えて、例えば6年生を対象とする郷土の歴史に関するプログラムなど新たな連携事業の開発が必要であろう。

(3) 当館の連携事業は多岐にわたり学芸員は多忙で負担となっている。これまで、当館は大学生以外のボランティアを受け入れていないが、真の連携には市民との協働の観点からも団体案内などにボランティアの導入を検討していく必要があるだろう。

当館は、基本的運営方針に示したように、地域博物館として、さまざまな博物館の地域連携によって、小・中・高校生を含む、地域の多くの方々と連携・交流し、市民にとって魅力ある博物館になるよう努めていきたい。

(和歌山市立博物館)

〔注〕

- 1) 2015年2月12日、和歌山市教育委員会承認。和歌山市立博物館ホームページにて2015年4月から和歌山市立博物館基本的運営方針を公開している。<http://www.wakayama-city-museum.jp/document/housin2015.pdf>
- 2) 新しい学習指導要領では、生活道具の時期による違いに着目し、電化製品が普及する前と普及した後で道具が改良され変わってきたことがわかる展示が求められている。例えば、たらいと洗濯板→二槽式電気洗濯機→全自動電気洗濯乾燥機。文部科学省『小学校学習指導要領（平成29年度告示）解説 社会編』日本文教出版、2018、45-46頁。
- 3) わかやままちなかミュージアムガイドは、以下のURLで入手できる。<http://www.wakayamakanko.com/wp2/wp-content/uploads/2017/08/matinaka.pdf>